

修士論文(要旨)

2016年7月

日中接触場面の談話における結束手段の使用実態  
—中国人上級日本語学習者を中心に—

指導 堀口 純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

214J3904

呉曉艷

Master's Thesis (Abstract)

July 2016

Methods of Cohesion in Contact Situations between Japanese and Chinese : Focusing on  
Advanced Chinese Learners of Japanese

Wu Xiaoyan

214J3904

Master's Program in Japanese Education

Graduate School of Language Education

J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor Sumiko Horiguchi

## 目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景・研究動機	1
1.2	研究目的	1
第2章	先行研究	3
2.1	テキストと結束性	3
2.2	談話における結束手段	3
2.3	談話の結束性とコミュニケーション能力	4
第3章	調査について	6
3.1	調査方法	6
3.2	調査の協力者	6
3.3	分析の枠組み	7
第4章	談話における論理的・時間的結束手段の使用実態	10
4.1	CとJそれぞれの論理的・時間的手段における各結束手段の使用実態	10
4.2	CとJそれぞれの接続詞使用の特徴	10
4.2.1	Cグループの接続詞「でも」の使用特徴	11
4.2.2	Cグループの接続詞「では」の使用特徴	14
4.2.3	Jグループの接続詞「それで」の使用特徴	19
4.3	CとJそれぞれの接続助詞使用の特徴	22
4.3.1	Cグループの接続助詞「て」の使用特徴	23
4.3.2	Cグループの条件表現を表す接続助詞の使用特徴	25
4.3.3	Cグループの接続助詞「けど・が」の使用特徴	26
4.3.4	Cグループの接続助詞「から・ので」の使用特徴	28
第5章	談話における内容的結束手段の使用実態	32
5.1	CとJそれぞれの内容的手段における各結束手段の使用実態	32
5.2	Cグループの「指示詞」の使用の特徴	33
5.3	Cグループの「省略語句」の使用の特徴	36
5.4	Cグループの「同一語句の反復」の使用の特徴	40
5.5	Cグループの「関連語句」の使用の特徴	45
5.6	Cグループの「近接の関係にある語句」の使用の特徴	47
第6章	考察と日本語教育への示唆	51
6.1	論理的・時間的結束手段による結束性	51
6.2	内容的結束手段による結束性	54
6.3	本稿からの結束手段の形式	56
第7章	本稿の限界と今後の課題	57

## 要旨

**キーワード：**日中接触， 結束手段， 接続表現， 省略， 指示詞， 繰り返し， コロケーション

## 研究背景・目的と分析枠組み

来日後、数が少ない会話相手の日本人店長との話を長く続けていきたいが、なかなか話を長く続けられない、その長く続けられない原因を探するために、20代の女性で友人関係の中国人上級日本語学習者を対象にしてデータを収集した。大神（2006）に基づき、論理的・時間的結束手段と内容的結束手段を分けて中国人日本語学習者の結束手段を分析した。

## 分析結果および考察

Cグループの接続詞の使用は、Jグループと比べて、単一で主に「でも・だって」、「では・じゃ」を中心に使用して、一番多く使用したのは「でも・だって」である。それに対して、Cグループと比べJグループが「それで」を多く使用した。また、Cグループの中で、一番多く使用されたのも「でも・だって」、「では・じゃ」が二番目で多く使用されたことが分かった。接続助詞による結束性を「文中の接続助詞」と「文末の接続助詞」の二種類に分けて分析した。そのうち、文末に使用されている接続助詞は、相手に条件や新しい情報を提示して、その条件や情報の下での帰結を相手に考えさせることによって、談話を続けさせ、相手との発話の間に結束性が生じたことが分かった。

Cグループの語彙的結束手段の使用では、「繰り返し」の使用が一番多い。また、コロケーションの結束手段も多く使用されたことも分かった。省略語句の使用では、中国人日本語学習者は、主に主題と主格の省略を中心に使用した例が多いのが見られた。指示詞の使用では、中国人日本語学習者は主にソ形を使用し、自分の主観的な視点から、コ形とソ形を使用したことも分かった。

学習者は、単に繰り返しなどを使用し、コロケーションの結束機能を重視しないと、発話内容が豊富にならなかつたり、パラグラフの発話の構成がしにくかつたり、話がよく進まずに詰まるようになっていたりする場合が出現しやすくなると思われる。

したがって、中国人日本語学習者は、相手が発話した後、次に何を話せばいいかなどがわからない場合、接続表現と語彙的結束手段のさまざまな機能を意識し、それらを使って発話のターンを確保したのが、談話を長く続けられる有効な一つの方法になると考える。

## 今後の課題

巨視的な視点からの結束性の分析や中国人日本語学習者の誤用の問題を視点に入れた分析を今後の課題としたい。

また、本稿は、時間の余裕がなかったため、条件表現の接続助詞、論理的・時間的結束手段の「その他」の部分、Cグループの使用特徴の母語干渉、CグループとJグループとの詳しい比較や「応答詞」による結束性について、分析できなかった。

今後、データを拡充して分析する必要があると思う。さらに、結束手段は、独話場面と対話場面による違いだけではなく、性別や年齢によつての違いがあると考えられるので、今後の課題に入れたい。

## 参考文献

- 有賀千佳子 (1992) 「対話における接続詞の機能について—『それで』の用法を手がかりに—」日本語教育 79 号, pp.89-101
- 石川守 (2014) 「『て』の用法について」『拓殖大学日本語紀要』 24, pp.1-16
- 市川保子 (1989) 「取り立て助詞『ハ』の誤用—談話レベルの誤用を中心に」『日本語教育』 67, pp.159-172
- 伊藤享介 (2005) 「接続助詞ケドの諸用法の統一的説明」『名古屋大学国語国文学』 96, pp.102-116
- 岩澤治美 (1985) 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』 56, pp.39-50
- 大神智春 (2005) 「中国人学習者の発話における反復と省略の問題」『九州大学留学生センター紀要』 第 14 号, pp.1-10
- 大神智春 (2006) 「中国人日本語学習者の発話における結束性」『九州大学留学生センター紀要』 第 15 号, pp.75-83
- 大塚純子 (1995) 「ディスコース・トピック省略と冗長さの減少について：中上級日本語学習者の場合」『國文』 83, pp.22-33
- 加藤薫 (1994) 「原因・理由の表現について—『ので』と『から』の異同を中心に—」『文化女子大学紀要』 2, pp.125-139 人文・社会科学的研究
- 柏崎秀子 (1987) 「発話者の心的態度からみた助詞『は』と『が』の使い分け」『教育心理学研究』 35, pp.57-64
- 木山三佳 (2003) 「連用修飾節を構成する接続助詞類の使用実態：作文データベースを用いて」『言語文化と日本語教育』 25, pp.13
- 木山三佳 (2004) 「学習者言語にみる接続助詞『から』の談話機能の発達」『世界の日本語教育—日本語教育論集』 14, pp.93-108
- 国立国語研究所 (1995) 『談話語の実態』東京：国立国語研究所
- 金水敏・田窪行則 (1992) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『指示詞』『日本語研究資料集』 第 1 期第 7 巻, pp.123-149
- 白川博之 (1996) 「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』 6, pp.9-17
- 陳相州 (2008) 「日本語会話データに見られる対比談話標識の使用実態」『言葉と文化』 9, pp.237-252
- 董博 (2011) 「言いさし『テ』形の談話機能—談話ストラテジーの観点から—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』 14, pp.235-246
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としての繰り返し」『国立国語研究所報告 104 研究報告集』 13, pp.267-302
- 永井典子 (2005) 「省略の復元プロセス」『日本語用論学会大会研究発表論文集』 1, pp.73-80
- 浜田麻里 (1991) 「『デハ』の機能—推論と接続語—」『阪大日本語研究』 3, pp.25-44
- 福富奈美 (2010) 「日本語会話における『繰り返し』発話について」『言語文化研究 (言語情報編)』 5, pp.105-125, 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科
- 堀口和吉 (1978) 「指示詞の表現性」『指示詞』『日本語研究資料集』 第 1 期第 7 巻 pp.74-90
- ハリデイ・ハサン (1975) 「テキストはどのように構成されるか」安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉 (1997, 訳) ひつじ書房根岸正純 (1968)